
ポレポレ物語

須田 繼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポレポレ物語

【NZコード】

N9467L

【作者名】

須田 繼

【あらすじ】

人の生き様と言うのは、案外笑えるものなのかもしれない。

姉に言われた一言「お前の人生つてギャグだよね」から作り始めたエッセイです。

基本的に実話ではある物の、コメディティスト。

登場する人物名は全て適当に差し替えてますが、こういう人生もあるという事で楽しんで頂ければ。

物語の最後には、須田がレベルアップします。

書いていて『他人の不幸は蜜の味』などと思って落ち込みつつ

不定期連載です。

宿題じゃない工作

小さな子どもと書つのは、誰かに踊らされたる事などやうだ。

小学校低学年の頃、私は母親に連れられて稻荷神社のお祭りに来ていた。

狭い範囲ながらも、いつもと違う出店と人でじつたがえした場所は、ちょっとした異世界。少ない額のお小遣いを握りしめて、私はキヨロキヨロと出店を見回す。

りんご飴や綿菓子、クレープといった甘い香り。お好み焼きやたこ焼きのソースの香り。そしてお面やコマのオモチャ。子供にとっての誘惑に満ちた空間で、私は親の姿を探す。

もちろん、「あれを買って」「これを買って」とおねだりするためには。

近所に住む友人たちも、親にねだつて既にオモチャを手に入れているのだし、買ってくれるはずだと思い込んでいた。

「これ買つて」

私が指したのは白い棒に斜めのラインの張った長い紙をぐるぐるに巻きつけたもの。軽く振るとシユルシユルと伸びる。

友達がそれで遊んでいる姿を見て、どうしてもほしくなつてしまつた。

しかし、私の握っているお小遣いの額では、残念ながら手が届かない。

期待のまなざしで母を見つめる。

しかし、母はこいつたべクトルでは非常に厳しい人だった。

「ダメ」

綺麗に夢をぶち壊される。

当然、それには駄々をこねて対抗するが、追い打ちは予想もしない方法だった。

「自分で作りなさい」

小学校低学年に無茶を言ひ母。

まあ、確かに作れないことはない仕組みだ。だが、それは大人から見た視点でのこと。小さなお子様にそのレベルの想像力を求めるのは、今思えばスバルタも良いところ。

しかし、私は見事に母の手の平で踊らされた。

家に帰った私は、珍しい丸い割り箸を取り出し、古い新聞とセロハンテープ、ハサミを取り出す。

新聞紙を同じ幅でジョキジョキと切り、セロハンテープでつなげて長い一枚の紙にする。その作業をひたすら行う。

ある程度の長さになつたら、今度は丸い割り箸に長くなつた新聞紙の端っこをぺたぺたとセロハンテープで張り付け、巻きずしの如くぐるぐるぐる……。最後までまき切つたら、台所からゴムを取り出し、固定。

一時間ほどひたすら待つた。

ちなみに、この工程は自力で編み出している。

待つている間はまだかまだかとサンタクロースを待つ気分である。そして、うまくいかどうかの期待と不安で胸がいっぱいだったの

を覚えている。

そして、時間は来た。

ゴムを外す。まずは巻かれた状態で固定されているかどうかの確認だ。

うまく、固定されていた。

喜び勇んで、今度は動かす。シュルシュルと、それは動いた。完璧だった。祭りで友達が遊んでいたものと同じ動き。

最初は感動でいっぱいだったのだが、二回ぐらい繰り返し遊んで冷静になった。

白黒だから、全然綺麗じゃない。

一週間足らずで、飽きたのだった。

須田はレベルがあがつた。
賢さが2あがつた。
器用さが2あがつた。
センスが1あがつた。

宿題じゃない工作（後書き）

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。

思いついた時に少しずつ追加していくと思しますので、暇な時にお立ち寄りいただければ幸いです。

幼少～現在までにあつた色々と順不同にアップして参ります。
エッセイは初めてですので、誤字脱字・シソノミ・感想をお待ちしております。

おまがいとは危険がいっぱい

おまがいとは、予想だにしない危険と隣り合わせだつたりする。

海のある町で育つた私の友達は、漁師を親族に持つ人が多く、かなり性格が荒い。

荒いのは性格だけでなく言葉もそうだ。海言葉のなまりの薄い私ですら電話をしている姿を見られて「喧嘩してるみたい」と都心部に住む友人に言われる。

そんな言葉も性格も荒い友人たちに囲まれつつ、私はおつとりとした子どもだつたため世話をよく焼かれた。

常にぼーっとしていた私は、彼女達から見ればかなり放つておけない油断しまくりのように見えたらしい（実際油断しまくりだったわけだが）、様々な場所に引っ張りまわされた。

ある時は山の獣道の先にある木の上の秘密基地。
ある時は採石場跡の崖を登つた先にある小さな稻荷様。
ある時は砂浜で荒波に巻き込まれたり。

激しくいろんな場所に連れまわされていた私だが、小学一年生のあたりによく行つた場所がある。

港にある鉄筋コンクリート系の資材置き場。

資材と言つてもゴミの部類だつたような気がする。

港はサザエやアワビの貝殻が多く、また枝も漂着する。そして極めつけは勝手に生えてくる海藻と雑草。

これらを使ってやる事は、おまがいどだった。

「けいちゃん、水くんできて！」

資材置き場のコンクリートのお家で、お母さん役のよしちゃんが指示を飛ばす。彼女は尖ったコンクリートを使って海藻を切っていた。お料理中という事だ。

「わかった」

素直に私はうなずく。片手に空のファイ・リーのビンを持って、コンクリの堤防の上を歩いた。

堤防から慎重に降りて、海水を汲む。

波が来ない場所で汲めれば良いが、海水が汲める場所と言つのは波が来ている場所だ。おかげで、靴はびしょびしょ。

しかし、当時の私にとつて『よしちゃんの命令は絶対』だったため、内心では嫌に思いながらバシャバシャと海に入る。

その動作は子どもの割にはのんびりしているため、私が半ば海に入つて水汲みをしている後ろを一緒に遊んでいるゆりちゃんが駆けていく。基本、ようちやんもゆりちゃんも体力のある健康優良児である。ちなみに私は不健康優良児だ。

水を汲み、今度は堤防を登る。

ゆりちゃんはひょいひょいとジャンプで駆けのぼってしまいが、私にはそんな事は出来ない。

体力がないのも理由の一つではあったが、当時は珍しかった喘息との付き合い方を、その頃の私は習得していなかつた事が大きい。

とにかく分かっているのは、走つたり跳んだりすると息ができないくなる事があるという事。夜中に呼吸困難を起こして大泣きをするなどやらだつたため、その恐怖は完全に刷り込まれていた。

今となつてはどの程度運動すると喘息が発症するか把握しているため、運動を恐れる事もなくなつた。しかし、小さな子供に『このぐらいの症状が出たら運動をやめれば良いんだよ』などと分かるはずもなく、研究も進んでいなかつたため教えてくれる人もいなかつた。

普通、いつなつた場合は喘息を起さない運動（水泳等）で体を鍛える、という案を思つてく。

しかし、私は怠惰だったため、『運動しなきゃ喘息起らんないよ』と直づ結論に達していた。（酷い）

そんなこんなで私は大周りをしてようじりしょと堤防に上る。その頃にはゆりちゃんは海藻をよしちゃんに渡して、再び港へジャンプしていた。（怖がりな私には、堤防の比較的高い場所から港に飛び降りるのも無理だつた）

捨てられたコンクリートが橋のようになつてゐる場所を歩き、私はよしづやくよしづやんの所にたどり着く。

「はー」

「ありがと」

お礼もせじかこひ、よしづやんはお水を受け取つて海藻にかける。カチコチになりかけていた海藻が再び柔らかくなつていた。

「じゃ、もう一回」

そう言って再びビンを渡される。私は「はい」と返事をしながらコンクリートの橋へと一歩踏み出した。

その時、悲劇は起こった。

ズル

踏みしめたはずの足が綺麗にスライドする感触があった。スローモーションで流れる景色の端に、落ちた海藻が見える。自分の足は現在濡れていて、踏み込んだ先には海藻がある。濡れた海藻と言うのは、かなりぬるぬるしている。

空が見え始める景色の中、ヤバいと思う間もなく本能的に体をひねった。何せ、自分の体は後方に倒れているのだから受け身が必要だ。

体は何とか回転したものの、残念ながら回転した『だけ』だった。

ゴン

そんな感じで、私は頭をコンクリートにぶつけた。
あとちょっとずれていたら、錆びついた鉄の方にグサリといつて『臨終』だつたかもしれない。

そういう意味では運が良かつたのではあるが、これは序曲だった。

何せ、私はこの時頭が痛いというよりは、すりむいた膝が痛かつた。

たのだ。

痛いよお、と顔を歪めながらゆづちゃんを振り向く。わよわよび、ゆづちゃんも海藻をとり終わって堤防の上にいた。

一人は、口をあんぐりと開けてこちらを凝視していた。

一人の姿を疑問に思いながら、私は打つたおでこの左側に手を当てる。何か、濡れた感触があつた。

そのまま手を見ると 赤い、といつか紅い。

これ？ 血？

気づいてしまつと急に恐怖が這いあがる。恥も外聞もなく、私は大泣きした。

大泣きする七歳児に一人がよつやく正気に戻る。

「私、お母さん呼んでくる！」

家が一番近くから、ゆづちゃんが、母親を呼びに走りだす。もつとも正しい判断だ。

そしてここから、ゆづちゃんの錯乱がすごい事になる。

「傷口洗わなきやー」

泣いてこぬ私の手をとつて、彼女は傷口を洗おうと港に向かった。

そして私の手を引き、あらう事が海水で傷口を洗い始める。

彼女の中の知識として、海水には傷口を早くふさぐ作用があるというものがあった。ただし、この知識には決定的に欠けている点があつた。『かさぶたが出来た状態』での話なのだ。

傷口から血が流れているような状況では当然適用されない。それどころかかえって感染症とかの危険が増すのだが、幼子二人にそれが分かるはずがない。

あわてて駆けつけたようちゃんの母親は、私を家に連れていくと傷口を消毒してくれた。

あまりの恐怖に大泣きし続けていた私を、私の母が迎えにきた。その頃には消毒されたガーゼが私の額に当たられていて、血がだらだらと流れるホラー・チックな状態からは何とか脱している。そんな私の手を母は引いていく。

私はこの後について考えては戦々恐々としていた。

頭を強打して血を流したのだ、病院に連れて行かれるかもしれない。

病院に行つたら、針で縫われるのかもしれない。

頭の検査とかもするのかもしれない。それはもしかしたらとても痛いのかもしれない。

子どもにとっては恐ろしい想像が頭の中を行進する。

そして、家につきました。

上の兄弟たちは私が頭をぶつけた事を知っていたらしく、母に、「

大丈夫だつた?」としきりに聞いていた。

そして母の結論は私の予想の斜め上を行つていた。

「こんなもん、絆創膏はつきや治る」

そうして、私の大怪我は幕を閉じた。

わけでもない。

「」からまた別の恐怖が待っていた。

「はい、痛くないよ~」

普段以上に優しい声音で私をあやす母。しかし、それは一層恐怖をあおつてしまふ。

「や、やだ~!」

泣きながらフルフルと首を振るが、ガシツと母は私の頭を固定した。

「はい、すぐに済むから ねッ」

完全に不意打ちで私の絆創膏がバリツと剥がされる。そして

「 めやあああああツー！」

余りの痛みに悶絶する私。

額と髪の生え際との境に出来た傷跡をふさぐ絆創膏は、見事に私の頭髪を巻き込んでがれる。

一気に行われるその痛みは、粘着力の強さと相まって尋常じやなかつた。

この痛みが三回繰り返されたあたりで、私は『縫われた方が良かつたんじゃないだろうか』と思つたり思わなかつたりした。

須田はレベルがあがつた。
体力が一あがつた。
トラウマが増えた。

おめでたせ危険がこつぱこ（後書き）

しゃうもなこお話を読んでいただきまして、ありがとうございます。
私としてはトライウマになるほど嫌な思い出なのですが、客観的にみ
るとかなり面白い事らしいです。
実際どうなんでしょう……。

夢は寝て見る物なのさ

夢と言つのは突拍子もなくて、けれど気付けば楽しいものでもある。

もちろん、これは寝て見る夢の話だ。

夢を見ないという人もいるが、夢の中の記憶は消えやすいので忘れてしまっているだけだと言われている。

私はと言えば、覚えている時は覚えている。しかも非常にアレな夢を。

中学の頃の夢としては、「なんものがった。

小学校以来の親友であるりつちゃんが、私に笑いかける。

「実はね、免許取つたんだ!」　注…この時の私の年齢は十四歳

夢の中なので、一般常識など思い出せない私は「へへ、すういね」となどとのん気に相槌を打つ。

そして、これでこの夢はオチない。

「だからせ、けいを乗せてつてあげる!」

軽車両に搭乗させられる私。唸る爆音。飛ばされていく人々。

起きた時は汗びっしょりだった。

これと同時期に見た夢にこんなものもあった。

出掛けようと家を出ると、ばあちゃんが車をふかして待っている。
ばあちゃんこの時八十歳。

「はよ乗れ！」

乗せられる私。唸る爆音。飛ばされていく人々
でこの夢は終
わらない。

湖に突っ込む車。ひび割れていくフロントガラス。

こんな感じでフローリングアウトしたので、やはつこの時も動悸がす
ごかつた。

最近よく見る夢は「んな感じ。

いつも通りに車を走らせて会社に向かへ。
その道のりの途中には五百メートルほどで終わるトンネルがあるので、

出口につかない。

遅刻してしまひと焦る心。それでもつかない。
心の中で叫びながらフードアウト。

いつも書くと悪夢しか見なによつに見えるが、そんなことは
ない。

どこのホテルに遊びに来ているか私と姉。

「やあ帰らつか」

姉が言うので私はうなづく。

二人でエレベーターに乗つて降りると、何故か家。

おかしいと思つて振り返ると、仏壇の位置にエレベーターがあり、

それが回転扉よろじくへへるつとまわると仏壇に……。

「何」
「何」

「お前知らなかつたのか？」

平然と仏壇の隣の柱を姉が押すと、ぐるりと回ってレベーターが現れる。

家を改造してしまつてゐる夢はこれだけではない。

家で鬼ごっこをしていて、何故か居間（床は畳）に暖炉がある。

夢の中では鬼から逃げるのに必死で暖炉に隠れていたが、起きてみるとシシコミ所満載である。

他にも、私は明晰夢を見た事がある。

明晰夢といつのは、夢の中で『これつて夢だ』と気が付いた上で見る夢の事を指す。

ゲーム脳の人だと見やすいらしいので、心中複雑なのだが、これが楽しい。

家にいた私は、これは夢だと気付いたため、ベランダから飛ぶ。夢の中なので、身一つでパラグライダーの如く空を飛んで楽しんだ。

しかし、残念なことにこの夢、『私が現実でできそうと思つてゐる事』を限界としてこもじしく、成層圏まで飛ぶとかは出来ないので、一番最初の明晰夢は悲惨だった。

庭で飛ぼうと思い立った私は、ぴょんとジャンプして浮いた。浮いてはいたし、前進もしていたのだが……

地上五センチメートルをふよふよと浮いて移動していた。超低速で。

歩いた方がまだ早いような速度だった。

須田はレベルがあがつた。
センスが1あがつた。
明晰夢を見れるようになつた。
精神ダメージを5受けた。

後から知る真実は痛い

自覚の薄い本当の事ほど、知った時にはショックを受ける。

仕事で疲れ果てた私を、当時ニートだった姉が迎える。時間は深夜11時といった所。

仕事柄、忙しい時には職場で徹夜なんて事もあるため、深夜は起きている姉との唯一の「ミニコニケーションの時間（姉が夜型の為）。私はものすごい朦朧としたまま受け应えるわけだが。

「どんちゃん。お前の母子手帳が出てきたよ」

書類整理をしていた姉が、懐かしグッズを引っ提げて目の前に現れた。ちなみに、どんちゃんとは私と姉のお互いの愛称である。由来についてはまた後日。

「相変わらず何でも取つとくね」

言ひながらも、若干興味をひかれて私は母子手帳を受け取る。取つておいたのはもちろん母だ。

他にも私と姉が使つている部屋のテーブルには、幼稚園ぐらいの頃の絵が並んでいる。

これらも子供らしい『「ナツサン? 何それおいしいの?』的な絵だけなのだが、文章で表わすのは難しい面白さなので割愛する。

「何、どんどの母子手帳もあんの?」

姉を愛称で呼びながら、もつ一冊の母子手帳を眺める。当然ながら、両方ともかなり古びていた。

「うさ。読み比べよつよ、ビニササヤん」

「しょ「うがな「いなあ」

じつちが年上だかわかりやしなこと電話を繰り広げながら、私と姉はお互いに比べ始める。

「出産時の体重」

「あ、ビニササヤんの方が重い」

「今じや逆転してゐけどね

「むこやー」

「あ、ビニササヤん頭ぶつけひきつた起つてたる」

「それひてそのぐいこの時に起つたんだ」

「うん。テーブルの角に頭ぶつけで白目むいてた。覚えてる?..」

「一歳にする満たない人間が覚えられるわけないだろ」

「あ、この時点でどんどんに体重に耐えている」

「なぬつー?」

などと盛り上がりっていた私達だったが、突然姉が大笑いし始めた。

「何だよ、近所迷惑な」

「だ、だつて……ふつ……どんちゃん、これつ……ふはつ」

全く笑いをこらえられない姉をいぶかしみつつ、私は姉の読んでいる私の母子手帳を見た。

一般的な定義として。

赤ちゃんは、お座りするようになつたら、ハイハイで動き回り、つかまり立ちできるようになります。

一応、母子手帳には八ヶ月ほどでハイハイするようになり、十ヶ月ぐらいしたらつかまり立ちすると書いてあります。

私は十ヶ月たつたあたりでつかまり立ちするようになり、一歳になる数日前にハイハイするようになったようです。

それまでの間は当然座ることしかできなかつたでしようから、座つたまま「あれ取つて」と指さしたりしておもちゃなどを獲得したのでしょう。

どんなだけものぐだだつたんだ、と思つてしましました。

須田はレベルが上がった。

賢さが1あがり、『自分のものぐささが昔からの事実だった』ことを知った。

しかし、20の精神的ダメージを受けた。

(母の) 夏の思い出

夏休みなのだから、夏休みの話を。

夏休みは楽しい長期休暇と言つ面があるが、宿題地獄と言つ面も存在する。

怠惰な上に学校で聞いた事はおおよそ一回で覚えてしまう。勉強に特化した頭を持つていた私には、宿題をやる意味を理解できない所があった。一種のセンスでどうにかできる数学を好み、反復が必要な語学を嫌う。幼いころの私は確かに、典型的な理系だった。

そんな私がこの宿題地獄に対して中学の頃に取つた行動は――

切らないで登校と言う物だった。

親の関係や、ただでさえ登校拒否で学校に引っ張り出すのが難しい私を、担任は責めなかつた。しかし、それなりに心苦しへはつたが、私はこう言い切つた。

「宿題をやらなかつたんじゃありません。答えが分からなかつただけです。」

全部白紙なのにいけしゃあしゃあとよく書つたと思つ。私の図太さはこの頃から田立ち始めた。

当然ながら、実際の所は問題文など読んじやしない。

そんな私をこの頃の両親は諦めたような目で見ていた。何せすぐ上の姉も登校拒否の挙句、高校を中退した所だった為だ。

代わりに、両親とは登校拒否の間にはよく話をした。

ふらふらと外に出歩くような事はしない臆病ものだった。その上、休んでいる事にしつかりと罪悪感を持っていた私は、休んでいる間も自画自詠をしていた。

三時くらいには母と一緒に居間でおやつだった。その時だけは会話が弾む。

「そういや、母ちゃんが子どもの頃も夏休みの工作とかあつたんだよね。何作ったの？」

軽い興味で私はそれを問うた。そして「一冊」と母は語りだす。

「切り絵を作ったなあ」

「切り絵？ また手間がかかりそうなもんだね」

「ただの切り絵じゃない。チョウチョの切り絵だ」

「は？」

「たくさんの中のチョウチョを捕まえたなあ」

母は目をキラキラさせながら思い出すように中空を見る。

私は、正直理解したくなくなつて乾いた声で「はあ」としか相槌が打てない。

「それで捕まえたチョウウチョウの羽をハサミで切ってな。[画用紙に羽]をセロハンテープで貼り付けたんだ。それで山の絵を作った」

「……どのぐらいのチョウウチョウを使ったの？」

「うーん、五十五ぐらいだったかなあ？」

「あの、聞きたいやうな、聞きたくないやうな感じだけど……本体は？」

「羽を取つちまうと死んじまうぞ」

切ない真実である。

「それで、まさかそれを学校に……」

「持つて行つたんだつけんが、気持ち悪いって言われてなあ。綺麗なのに」

「そりゃ気持ち悪いって言われるだろうね」

戦後の食糧難に育つた母は、とてもたくましい人です。

須田はレベルが上がらなかつた。
母のいらない情報を手に入れた。

カレーなる調理実習

家の常識は、社会の常識とは限らない。

小学校五年生。調理実習で作る事になつたのは、おおよその子どもたちの好物であるカレーだった。

班ごとにカレーご飯を作り、昼食にはそれらを食べる。その計画の主導権は、当然のように女の子が握っていた。

男子1に対し、女子2・5と、女子の多いクラスだった私は、男子が一人きりの班だった。

そして、小学校高学年の頃の女の子というのは大変ませており、下手な男子よりも強いなんて事はざらだ。そして、女だてらにガキ大将をしていたようちやんと、私は同じ班だった。

小学校低学年の頃こそ無茶な命令をされたり、石を投げられたりとなかなか過激だったようちやんだったが、この頃には丸くなつていた。

そしてそのようちやんが下す命令により、私はルー調達係となつていた。

「でも、辛せぬまいある？」

重要な問題である。これが違つと味がさっぱり変わってしまうし。他者の好みなどさつぱりわかつていない私はとりあえず聞いてみる。

「ウチは甘口だよ」

「しょうじゅうちゃんが言つ。」

「私の家は中辛だけど」

一応自分の言い分も言つておく。 そやつて意見を出し合ひ、

中辛と言つたのは私と男子の朝田だけだった。

そしてうなつていったようちゅんは思いついたように提案する。

「甘口と中辛を混ぜよつー。」

そして、購入するルーの味は決まった。

「母ちゅん。 今日は買い物に連れてつて」

私は家に帰つてからスーパーに夕食の材料を買いに行つとした
母を捕まえる。

「調理実習で作るカレーのルーを買つてこなきゃいけないの」

訴えると、母は「ああ」と納得して私をひきつれて買い物に向かう。 行先は近所のスーパー。 店長を同じクラスの小谷の親がやっていいる店である。

そして、私は『いつも通りのルーを購入』してしまったのだ。

調理実習の当日、料理が得意とは言えない私は片付けと調理器具の用意の係を勝手にやっていた。

そして、最後の仕上げのルーの出番となつた時に、それは起つた。

「え……」

ルーを見たよしちゃんが凍りつく。それを見た他のメンバーも私の買つてきたルーに固まつていた。

その様子に、どうやら何かしでかしてしまつたらしくと空気だけで察知した私は、冷汗だらだらな状態で首を傾げた。

「中辛と甘口……だつたよね？」

そのルーのパッケージにはきつちつと中辛と甘口の文字がおどりっている。しかし、彼女達の問題はそこではなかつた。

「な、何で、バーモ トじやないのぉーー！」

私が買つたのはジャ カレーだつた。

「『J』、『G』 デンカレーよりはこつちかなつて……」

必死の弁明だが、おそらくゴールンカレーの辛さについてこれる小学生はいない。

バーントカレーの辛さが1ならば、ヤワカレーの辛さは4ぐらいになる。大人でも辛い物が苦手な人には絶対に食べられない辛さである。

しかし、辛い物好きの叔父と同居しているため、我が家のかレーは友人一同の家で出されるカレーとは一線を画していた。

「――けいちゃん、最悪！――」

異口同音に女の子メンバーから罵倒され、気の弱かつた私は目をウルウルさせながら謝罪していた。

完成したカレーは、当然ながら他の女の子達には食べられず。彼女達は他の班のカレーを分けてもらう事でしのいでいた。そして私は私で自分の班のカレーをむしゃむしゃと食べる。

いつも通り、おいしいカレーだった。

ちなみに、このカレーで救われた面々も実はいた。

「――須田、最高！――」

異口同音に称賛する男子達。甘々カレーにうんざりしていた彼ら

にとつて、私の選んだルーは理想だったらしい。

須田はレベルが上がった。
賢さが1あがり、常識を一つ知つた。
トラウマが増えた。

酔っ払いパンジー

お酒は二十歳になつてから飲みましょ'。

その日、姉ははりきつていた。

「本格、ウナギのかば焼きを作るぞーーー！」

「どんどん素敵～！」

後ろで姉をあおる私。姉曰く、「本当にお前は a good actor (煽り屋) だよ。」

「本格かば焼きでは、ウナギの臭みを取る為に料理酒につきますが、父ちゃんの酒を少しでも消費するために焼酎でG.O.ーーー！」

ノリノリな姉は焼酎にウナギ様をどっぷりと付けた上でジューージューと焼いていました。
そしてそれを家族で食す。

「おこしー」

率直な感想を述べる私。

「高いウナギ使つただけあるねえ」

材料を購入してきた母も満足。

「えつへん。わたしの腕だよん」

鼻を伸ばす姉。

「まあまあだな」

『冗談混じりな評価を下す父。まあ、他の兄弟はこの頃家を出て言つているのでないわけですが、そんな感じで完食しました。

が、これは姉の仕掛けた罠だった。

いつも通りPCを立ち上げてチャットを開始する私。小説を書き始めて一年ほど経ち、学校の事を忘れて楽しんでおりました。熱中し始めて三十分程すると、PCのある部屋の隣の部屋に客人が来ている事に気づく。じつそり覗くと、姉と姉の彼氏である堀田氏。

「おりょ？ いらつしゃい」

「邪魔します」

ペーリーとお互に会釈しながら、冬の寒さに負けて一人の炬燵に

混ざる。果てしないお邪魔虫である。

「寒いね」

「どうせやん、顔真っ赤だよ。大丈夫か?」

「隣の部屋、尋常じゃない寒さだからね」

冬は外よりも寒く、夏は外よりも暑い欠陥住宅的な部屋が、PC部屋である。

そう、この時私たちは、隣の部屋の寒さにより私の顔が赤くなっているのだと思っていた。

そうやってひとしきり暖まってから、私はPC部屋に戻つてチャットを再開する。

そのチャットの仲間全員に言える事だが、チャットでの会話は異常に高テンションで進行していた、毎回。その中で、比較的年齢の上の方だった私は基本的にストッパー役。常軌を逸して他者を傷つけ始めた場合に「そのぐらいにしきなよ」と水を差す役である。まあ、その常軌を逸したやり取りが客観的に見て面白いから、常連と化していたのだが。

『それじゃ、寒さに耐えきれなくなってきたから落ちるね。』

『N』の文字が大量に流れるのを確認し、私は退出ボタンを押す。そして、PCの電源を切ると、私は姉達のいる部屋の炬燵に滑り込む。

「寒いー。」

「そりやねえ」

苦笑しつつ、堀田氏が少しずれてくれた。プルプルと小動物のようにやって、私は炬燵に限界まで入る。

「そういうや、どんちゃんは最近エニアグラムにはまってるんだよねえ」

姉の言葉に、私の耳はびくびくする。

エニアグラムとは、円を九等分した上で作成される特殊な図形の事を本来指す。しかし、私のはまっているエニアグラムは性格診断に使われるものだ。

大きく分けて九タイプ、細かく分けて一十七タイプに分類し、人間関係等の性格が影響する問題を解決するための研究。

この中でも竜頭万里子さんの『究極のエニアグラム』にはまっていた。

そして、私は……二十分近くエニアグラムについて一人に語つていた。その間、二人には一切しゃべらせずに。

迷惑極まりない私に、やがて異変は起こった。

「うう……」

「ど、どうしたどんちゃん！ 真っ青だよ！」

「頭痛い……気持ち悪い……」

吐き氣と銃器で殴られたよつな頭痛。姉の皿が生ぬるくなつた。

「どうせやん、まさか……酔つぱらつた?」

「そんな、私は酒なんか飲んで……うなあい?」

「うなぎつぼーね」

「つなぎで酔わないよ、普通」

堀田氏が常識的なシッ ハリをこられるものの、私は依然として吐き氣と戦つてゐる状態。そこで、どうしようもない結論を姉が出す。

「どうせやん……」

尋常じやないほど、下世だね

以後、私はやはり臭み消しに焼酎に付けたエビフライに酔い、ブランデーケーキに酔い、高級な漬物で酔つぱらつた。

高校の頃の切ない思い出である。

須田はレベルがあがつた。
体力が1あがつた。
下戸の技能が発覚した。

酔っ払いラプソディー（後書き）

作中のエニアグラムについては下記のサイトを参照。
情報量がすごいのでご注意ください。

『究極のエニアグラム』

<http://www.mirai.ne.jp/ryutou>

- m /

あいこおじやことかわいこわたし（前書き）

久方ぶりの投稿ですが、相変わらず酷いお話です。
お付き合い頂ければこれ幸い。

かっこおじやくわたりわたし

我が家には、すうじい叔父がいる。

私の叔父は鍼灸師である。まあ、針やお灸、マッサージで慢性的な病気をどうにかする職業ですね。

その治療院は我が家とつながっており、廊下のガラス戸をがらがらと開けると治療院になっている。ちなみに、治療院にはトイレは無いので、トイレに向かうお密さんと顔が合つとかはよくある。

そんな『先生』と呼ばれるような立場の叔父の何がすうじいかというと……強面なのだ。そりやもつ、『ヤクザですか?』と聞きたくなるような。

その強面のせいでも、いくつかの伝説を持つている。

幼稚園の学芸会では金太郎を倒すようなクマだった。日光にバイクで行き、おみやげ物の木刀を背負つて走っていたら、集会に向かう暴走族と間違えられて警察に止められた。お灸で使うもぐさ（原料はよもぎ。無害）を仕入れてバイクを走らせていたら、大麻の運び屋と間違えられて警察に止められた。暴走族の若いお兄ちゃんがうるさかつたので、表に怒鳴りにいつたら本物と間違えられて平謝りされた。

このぐらい、強面なのだ。

恰幅がよく、マッサージもやる関係で体力もあり、柔道をやってたせいで腕つぶしも強い。どうやると相手が痛がるか、なんて職業柄当然のようにわかっている叔父は、その強面もあって私や兄弟達にそりやもう恐れられていた。

兄弟だけではない。我が家に遊びに来て怒られた友人達からも「けいちゃんのおじさんは怖い」と幼稚園生や小学生の頃はよく言われていた。

なぜそんなに怒られるか。それは先述した我が家と治療院の関係にある。

我が家は一階建てで、一回にある一部の部屋は……治療院の真上に存在するのだ。そして、そこではびっ子が鬼ごっこでも始めようものなれば……

「うるせええええつ……」

と叔父に怒鳴られ、追いかけ回される。そしてあえなくちびっ子は捕まり、げんこつによる制裁が加えられるのだ。相手がどこの子供だらうと関係なく。

ちなみに、次兄は線香で根性焼きをされていた。

そんな恐怖の叔父も、正月にはけいちゃんとお年玉をくれる。そして、幼稚園生の私にこう聞いた。

「お前、五百円十枚とこのお札五枚どっちがいい」

そう言つて叔父が出しているのは千円札である。

十円札の価値を全くわかつていなかつた私は元氣に答えた。

「五百五十枚……」

「……やつすいなあ、お前」

叔父の言つてこる意味も分からず私は五百五十枚をもひつてはしゃいでいた。

こんな感じで、叔父は甥・姪で遊ぶことが多かつた。そんな叔父への逆襲は、叔父にとつてはかなり想定外のところからだつたらしい。

ある日、私は叔父から「いつ頼まれた。

「ちよつと出かけてくるから、留守番してろ。電話が鳴つたらうちやんと出るんだぞ」

「うそ

「電話一回につき五百円やる

「わーーー。」

無邪気に喜んで、私は店の電話番をした。

この頃、留守番電話なんて高等な物がなかつたための処置である。ちなみに、我が家は黒電話だった。

そうして一時間ぐらいたつ頃、叔父が帰ってきた。

「どうだつた？」

「間違い電話だつた」

「そりゃ

「ん」

「ここにこ笑いながら私は手を出す。

「電話一回で百円」

「……」

須田はレベルがあがつた。

賢さが2あがつた。

百円を手に入れた。

おじからの信頼が5さがつた。

高校受験の思い出（前書き）

ポレポレの中で比較すると暗いお話です。受験中の方は見ない方が良いかもしません。

人生の中で大きな挫折という物は、余程の幸運がない限り『全く無い』などありえない。

それが本当に幸運なのか、と言つのはわからないけれど。

比較的幸福な子供時代を過ごした私は、中学で壁にぶち当たった。たぶん、アイツは私を軽くからかっただけだつたのだ。それに対し、私は反論したくなり、けれど本能的に口を閉ざした。

当時を振り返れば、アレは思考の暴走だつたのだと思う。最初に強い感情が生まれ、それを言葉や態度にあらわすため思考が、同時に無数に生まれる。

結果、私はどうなるかと言えば、無表情で何も言わず、何も反応できなかつた。

（私の作品でキレると無表情になるキャラクターが多いのはこんな経験からだつたり……）

パソコンに例えるなら、処理を多く実行しすぎてオーバーフローし、フリーズした状態だつた。

この状態から先に進むと恐慌状態に陥るのだが、私はそれが不安で仕方なかつた。恐慌状態になつた私を友人としてつき合つていた

人々が避けるようになるのではないか。私は、その恐怖に耐えられず、学校に行けなくなつた。

当然ながら、オーバーフロー状態の私はそれをうまく説明できず、ひたすら体調不良を理由に休んでいた。

休むことは両親から許された物の、私の中できあがりつつあった私の基準は、自分をダメな人間と判定するようになつていた。周囲が大丈夫だと言つても、私は私が大丈夫じゃないと判断する。自分の完璧主義な側面が見事にマイナスに働き、よけいに私は自己評価を下げる結果になつた。

そんな、コンプレックスの塊になつていた私も、受験という岐路に立たされた。

ダメダメな私にも、うつすらとした夢がある。まあ、夢と言つまどはつきりしたものでは実はないのだが。

自分自身を省みて、私は『技術職しかない』と思うようになつていたのだ。サービス業ができるほど愛想が良くはなく、第一次産業ができるほど体力がない。そのため、私は『製造業か情報系、伝統工芸の路線しかない』と考え、志望する高校は一つに絞っていた。

選ぼうと考えていた科は二つ。一つは倍率が高い情報系。一つは倍率はそれほどではないが、女性が確実にいないだろう電気系。

私は、情報系の科の受験をした。

休みまくつていた私は当然のように推薦を受けられず、一般受験で勝負することになつた。

当然担任の石上先生は必死に反対したが、『不合格になつたら滑り止めで受験するバカ高校に入る』と言い切つて受験した。石上先生は半泣きだったので、ちょっと申し訳なくも思った。

休み続けていたしつぺ返しとしての不得意な勉強を、自習でどうにかしようと努力する。学校の教師に助けを求めるのも、家の人に助けを求めるのも嫌だった。自分の力だけで受験し、落ちても後悔するものかと心に決めていた。

私と同じ科に受験する子はあと一人いて、違うクラスではあったが私たちにはそれなりに仲良くなつた。

受験日には私は一人で行動していたが、受験発表では同じ中学の人間が固まつて高校に行くことになつた。

落ちても仕方ないとつての受験は、筆記の点数は三人の中で一番良かつた。けれど、内申の点数は確実に三人の中で一番下だ。

私は落ちる覚悟でもつて自分の番号を探した。

私の番号は、無かつた。

やつぱり。

諦観とともに自分の番号を見た。

二人とも合格したのだろう。

そう思つてよく見ると、見覚えのある番号は一つだけだった。

一緒に受けた西田さんも落ちていた。

一人合格してしまった本村さんが、微妙な顔で硬直している。さすがに本村さんがかわいそうだった。

そして、まあ、涙をためてプルプルし始めたあたりで予想はしていたが、西田さんが号泣しだした。

「ああ……つらかったね。よしよし」

困りながらも西田さんを慰める。そして本村さんに小声で「何とかしどくよ」と苦笑した。

本村さんは『じめん』とジェスチャーして、他の友人の所へ駆けていく。

当然ながら、大泣きする西田さんは非常に目立った。

「大丈夫?」

声をかけてきたのは小学校の同級生であり、西田さんの親友でもある鈴ちゃんりんちゃんだつた。顔見知りと言うことで私も遠慮はしない。

「大丈夫じゃないよ」

苦笑しながら西田さんを鈴ちゃんに引き渡す。

「やつかそうか、落ちちゃったか」

「うえええええ」

鈴ちゃんは西田さんの頭をなでてあやす。鈴ちゃんと一緒にいた他の西田さんの友人たちも彼女を慰める。

そしてふと、同じく小学校の同級生である理絵ちゃんが私の存在に気づいた。

「須田は受かつたの？」

「うん

首を振りながらあまりにもあつさつ回答したため、空気が凍つた。ちと失敗したらしい。

「えええええーー？」

「予想はしてたから、西田さんほど衝撃はないんだよ

「や、そつか

微妙に言いつらしあうに理絵ちゃんが私に言つ。だから、私はそこにつけこんだ。

「じゃ、悪いけど西田さんをよひこべ

「うそ」

私は西田さんを預け、近くにいる学年主任に話しかける。

「先生」

「どうだつた?」

「私と西田さんは落ちましたけど、本村さんは合格しましたよ」

いつもと同じ調子で話すと、先生の表情が落ち込んだ風になるのが分かった。

「やうか

「」の後は学校で口上先生に報告すれば良いですかね

「やうだな。気をつけて帰れよ」

「はー」

先生に礼をして私は立ち去る。

普段よりも速い足取り。

誰かに会わせる必要はない。だって私一人で歩いているのだから。合格した子達と一緒にいるのが申し訳なくて、私は早歩きで駅に向かう。この調子で歩けば、他の子達が乗るだろう電車よりも一本早い電車に乗れる。しかし、駅に着いてからちょっとした誤算があ

つた。

駅についてすぐに出発する電車に乗れる状態にはなった。けれど、他の高校の合格発表から帰つてきていった子達と合流する結果となってしまった。

「須田ちやへん！」

笑いながら同じクラスの石崎さんが手を振る。きっと合格したのだろう。

「合格？ めでとう！」

努めて明るく彼女を祝う。すると他の子達もやってきて、口々に感想を言い合つ。それに曖昧にあいつちをしていた。そして一人が、私にあの質問をしてしまう。

「須田ちやんは合格したんでしょう？」

今度は少し聞をおいてから首を振る。

「落ちたよ」

苦笑しながらかわいげなく驚いていた。

「普通落ちたら大泣きするもんじやないのー？」

勝手に決めるな、と内心で思ひながらも、「予想できただからね」と濁す。

「落ちてる人間が混ざつてると喜びづらいでしょ。私は早めに帰つ

てるね「

言いながら早々に駅の構内に入つてしまつ。

まるで他人を気遣つて距離をとつてゐるかのよう。

けれど、違うのだ。

他人に氣を使う余裕がないから、早々に離れたいだけ。

皆が喜びにくいから、とかは都合の良い理由だ。

本当は皆がいると私が泣けないだけなのだ。

やつてきた電車に私は一人乗る。乗りやすい入り口近くの車両ではなく、端っここの車両に。誰も来ないようにな。

まだまだ口は高くて、いつそ眩しければ誰も私を気にしないだろうに。

思いながら、私は目元をハンカチで覆つて、嗚咽をこらえて泣いた。

努力したのだ。
頑張ったのだ。
少しだけ、希望を見てしまつたのだ。

けれど、落ちたから ダメだつたから、覚悟する。

「の電車を降りたら、泣かない。

家族にも、担任にも笑顔で言つてやる。

「落ちました」

「そりゃ……」

石上先生は落ち込んだ雰囲気で私に言つ。

「その……大丈夫か？」

「はい。予想はできてましたので。×高に決まつただけですし

滑り止めの高校に行くことが決まつただけだ。あそこも『仮合格』
だが仕方ない。

「それじゃ、失礼します」

私はすたすと家に帰る。家で報告をすると、家族にはいつも通り笑い飛ばされた。

そして、このお話をちやんと落ちを付けてくれるのが私の周囲である。

「継^{けい}ちゃん、聞いた?」

小学校からの付き合いである陽子^{ひなこ}ちゃんが休み時間に話しかけてくる。

「何を?」

「三組は全員合格したらしいじゃん。一組は十人近く落ちたらしい

「げ」

四十人クラスで十人落ちると書つていて、この合格率の低さもわかつていただけたと思つ。公立高校の受験でこの合格率は田舎的にあり得ない。

その合格率の引き下げに一役買つてこり私としては、ぜんぜん笑えない。

「だからさ、石上ティーチャー最後の方になると泣いてたらしくな」

その時、私は思った。

落ちるとわかっていて受験して、石上先生^{じめんな}な。

私は一生、石上先生には頭が上がらない。

須田はレベルが上がった。
賢さが3上がった。
覚悟を手に入れた。

類は友どうりかドッペルゲンガーを呼んだ

彼女は、私のとつての【運命】だったのかもしれない。

別にカミングアウトではないが、それはそれは鮮烈な始まりだった。

高校受験を見事に失敗し、あげく『仮合格』と言つ謎すぎる状態で私の高校生活は幕を開けた。

どういう状態か簡単に言つならば

【成績は問題なくとも素行的に問題児だから、一年間様子を見るね】

と言つことである。

私立なだけあつてなかなかえげつない。

そう、私の住んでいる地域では、公立高校よりも私立高校の地位

が低いという謎の状態になつていて、貧乏人が多いためか私立高校に進む子供は少なく、当然ながら資質的に優れた子供は公立高校に進む。結果、私の入学した私立高校は、立派なバカ高校だった。

故に、戦々恐々とする部分があつた。明らかに、生徒にヤンキーが多いのだから……。

実際入学してどうだつたかと言えば、クラスの三分の一はヤンキー系列でした。

うん。予想通り。

しかし、意外に多かつたのが……オタク系である。これもクラスの三分の一ほどを占めている。残る人々は比較的標準的なタイプだった。

当然ながら、私はオタク系である。

そんなこんなで中学とはつきあう人間がガラリと変わつた環境で、私がまず近づいたのは同じ中学で今では親友でもあるちーちゃんである。ぶっちゃけ、中学の頃は大した付き合いはなかつたのだが、通学時に同じ時間帯に電車を待つ関係で仲良くなつた。

その次は後ろの席に座つていた山岡さんである。中学で同じ部活の部員同士であつた安井さんと彼女が友人同士だつたのだ。そこでの繋がりから話が弾み、やがてテストの際にはお互い利用し合つてな協力関係になつた。

テスト直前、彼女は覚えるためにテスト範囲をよく朗読した。それを私は聞きながら覚え、出そうな箇所や考え方のコツを彼女に教える。そのおかげで、彼女と私の成績はいつでも近い場所にあつた。

さて、問題の【運命】はたいそう立つ存在だった。

他者を寄せ付けない空気。高みの見物をしている。そう印象づけさせるような視線だった。

そのせいもあってか、彼女の近くにいる人間は『ぐぐぐわずか。

彼女 長沢さんを見て、私は思ってしまったのだ。

何か、自分を見ているようだ。

それは可能性の話。

私が末っ子ではなく、長女に生まれて

私が親に期待されない子供ではなく、親の期待を一身に背負つ子供で

私が学校の成績など大した問題ではないのだと教えられるのではなく、学校の成績が全てと教えられて

私が受験や登校拒否などの失敗をせず、全てが『親の予定通り』に進んでいたら

私は『彼女』になつたのだろうと思つた。他者とつきあつ際に無駄にプライドの低い『私』ではなく、高いプライドと自信を持つて戦う『彼女』に。

なぜかと言えば、私は彼女の感覚が手に取るよつにわかつてしまつたからだ。

簡単な質問を投げかけられ、なぜ自分がこんなことを教えねばならないのだという不機嫌

簡単な問題も解けずに下の成績をさまよつ級友に対しての嘲笑

簡単なことしか教えない教師への不満と侮蔑

彼女はそれほどこれらをあからさまには表に出していくない。けれど、どうしても伝わってしまう。おそらく、彼女と私の感覚が近づきあむせいだ。

そのせいもあって、ある時から私は彼女を観察していた。

結論としては、教師に対しての彼女はたいそうな猫かぶりである。成績をあげる上で教師への心証を上げるというのは有効だという打算だろう。

そうして観察していたある日、移動教室で全員が別の教室へと向

かつていた。人が混沌とした状態になっていたその時に、普段席が遠い彼女の隣を私は歩くことになった。なので、私は思いきってこう話しかけた。

「猫かぶつてるでしょ？」

彼女は綺麗な目を少し見開いて、そして細めた。

「よくわかったね」

正解だ、と彼女は笑う。

それがきつかけ。それが始まり。

そこから、私と彼女は時折一緒にいるようになつた。私と彼女の間に誰か入れば、私と彼女はあうんの呼吸で相手をからかう。何せ、彼女の考えている事が私は手に取るようわかるし、私が考えている事も彼女はよくわかっている。特に打ち合わせもせずに、同時に同じ事ができる。一卵性双生児のような感覚だ。赤の他人にも関わらず。

彼女は「周りはバカばかりだった」とよくもらした。「だけど須田は頭が悪くない」と。けれど、本当は違うと私は思つてゐる。頭が悪いか悪くないかじやない。私が彼女を理解できるのは、鏡の

ように彼女と私がよく似ているから。いくら賢くても、彼女を理解できない人間は本当はたくさんいる。

そして、それは私にも返ってくるものだ。いくら賢くても、私を理解できるかどうかはそこでは測れない。

私も彼女も、当時は理解者を欲していた。だから、お互いのいる場所はちょっとだけ居心地がよく、けれど居心地が悪い。鏡のようだからこそ、つらいこともある。

そんな私たちは一年の時に別々のクラスになり、いつかつい口をきかなくなつた。それはとてもあつれいと。

そして、三年の時にもう一度同じクラスになると、今度は一年の時のように仲良くなる。

「一年の時は全然話さなかつたね」

ある時そんな話を彼女にふつた。すると彼女の返答はいつもだつた。

「必要なかつたから」

気持ちは非常によくわかるので、私は笑つた。

けれど、本当は少し寂しかったよ。

あの時言えなかつた言葉を、ここに記す。

まあ、そんな彼女との初めての軋轢^{あつれき}は一年の時の中間テスト発表時だった。

「成績の方の推薦を取つた私が一位というのはおかしいとは思ったんだけどね」

私の隣で冷え冷えとした視線を長沢さんが送る。そりやもう、居心地が悪くて私は思わず硬直する。

順位表にある長沢さんの名前の右隣 一位の欄には私の名前。
実は、自分が一位だと言うことは面談で担任から知らされていたが、言わなきやばないと高をくくっていた。玄関に張り出されるという事を知らずに……。

かくして、『仮合格』と言う正式に合格していない人間が中間テストでトップを取つてしまつという珍事は幕を閉じる。

この後も、中間テストでは長沢さんから冷たい視線を私は送られ続けた。しかし、体育を含む実技ではボロボロだつたため、期末テストで一位を取ることは決してなかつた。

覚悟して挑んだ高校受験は、思いのほか私に力を与え、大切な経験として私を育む飼料となる。

そう、高校時代は私にとって、この後に控える冬を乗り越えるた

めの秋の季節となるのだ。（もしやもしや）

ちなみにその冬とは、やはり継続して受験といつも冬である。

須田はレベルが上がった。

賢さが1上がった。

友人を複数手に入れた。
ちょっとびりやすらいだ。

人が倒れる所に遭遇するとパニック起りますよね

人生の中でも、想定外のトラブルといつのは確實にあるもので。

高校の頃の話だ。

パソコン部と言う名のワープロ部に入った私は、親友ちーちゃんと放課後はよく行動を共にした。同じ部活で同じ中学出身、そして何より趣味が似通っていた私たちは、部活では喋りまくりで文章を打ちまくる。

ブラインドタッチを早々に覚えてしまった関係で、部活動中に私たちがやる事は少なく、結果顧問とよく三人でしゃべっていた。

その日は、何人かの生徒と教師が献血をしていた。私は体力に不安があつたため献血を拒否している。

そして、この献血でちょっとしたトラブルが部活動中に発生したのだ。

いつものように、準備室で顧問とちーちゃんと私はだべっていた。

「テトリスとかあるなら、生徒用パソコンの方に入れてくれりゃ良いのに」

「勉強しないだうが」

愚痴つぱく言った言葉に先生がつつこみを入れる。そんなやり取りをしていたからこそ、私たちは完全に油断していた。

正直、何を話していたのかは覚えていない。

ただ、ある瞬間から先生が反応しなくなつたのだ。

そして椅子に座つたまま、天井を首だけで見上げるようにながづくりと頭が後ろに動いたのだ。

おふざけでやつている氣絶したフリだう 私もそう思ったのだから、ちーちゃんがそう思つたことは仕方なかつた。

「んもう！ 先生なにやつてんの！」

ちーちゃんが先生の肩を強めにたたく。いつものことだ。

それで先生が痛がるものいつものこと だつたのに、先生はあらう事か

泡を吹いた。

うん。氣絶して泡を吹くと、人間でもカーネの吐く泡みたいになるんですね。『てんかん』かよ。

あたりにちーちゃんの悲鳴が響きわたった。私は声を出さなかつたが、これは冷静だつたんではなく、パニックから声が出なかつただけである。

「どうしたの！？」

ちーちゃんの悲鳴に部長が駆けつける。

「せ、先生が泡吹いて　！」

パニックになりながらちーちゃんは説明する。涙目だ。
さすがに泡を吹いてしまった時の対処など高校生が知るはずもない、私は瞬時に部屋から出た。

「養護の先生呼んでくる！」

そう言つて私は走つた。

保健室が北棟の一階で、パソコンルームが南棟の四階というのは何の因果か。

かなり遠いが、専門家を呼ぶのがベターだ。

何か、後ろで騒いでいたような気がしたが、私はパソコンルームを後にする。今思えば、一番楽な仕事を奪つたような気がしなくもない。

しかし、予想外に助けは近場にいた。二階に降りたところでクラス担任に出くわしたのだ。

「先生！」

私の焦り方に驚いていた風なクラス担任だったが、私は可能な限り冷静に状況を伝える。

「鈴木先生が倒れたんです」

「え！？」

「意識がなくて、泡吹いています。パソコンルームにいます」

「わかった」

「私は今から青木先生（養護教諭）を呼んできます」

伝えるだけ伝えて、私は再び走り出す。喘息持ちなのがたたつて苦しいが、緊急事態につきあえてそこから口をそらす。
保健室にたどり着いた私は青木先生を見つける。

「先生！」

「何？」

「鈴木先生が倒れたんです！ 意識がなくて、泡まで吹いちゃって……」

報告した時に、青木先生は『ああ、やつちやつたな』的な生ぬるい表情をしていた。

「貧血かなあ」

青木先生のつぶやきに、私は『ああ、なるほど』みたいになってしまった。

おそらく、鈴木先生は比較的無茶な献血を行つてしまつたのだろう。そして、献血した日は安静にしているのが普通なのに、ゲームの話で盛り上がつた関係で血圧上昇 気絶つてことですかい。

その後、鈴木先生は普通に意識を取り戻し、次の日は普通に元気だつた。

俺達の寿命を返せ。

須田はレベルが上がつた。
体力が1上がつた。
冷静さが1上がつた。
寿命が縮んだ。

人が倒れる所に遭遇するとパニック起^ひくよね（後書き）

追記

ちーちゃんの話では、最終的に先生は痙攣けいれんまで起こして大変だつたらしい。救助要請に走つといて良かった……。

おばあちゃんは心配性

「老体にとつて、一番下の孫ところのは可愛くて仕方のない物らしい。

私が中学生の頃まで、我が家はかなりの人数の家族になっていた。父・母・兄一人に姉一人・叔父・そして祖母。祖父は私が生まれる前に亡くなっていたが、ざつと八人家族である。これだけ大人数だと大変にぎやかな家庭であった。

そして、祖母は私と次兄をたいそう可愛がった。一人とも食が細いため、自分の分の食べ物を与えるようとしたりしていた。それを目ざとく見つける食いしん坊な姉がかつさらい、姉はよく怒られていたが気にしていなかつた。

そんな祖母は心配性で、次兄が夕方になつても帰つてこないと家の前で待つていた。そして帰ってきた次兄に「恥ずかしい！」と怒られる。

この心配性っぷりは当然私にも適用され、放課後まで残つて作業

をしていると、祖母が校門のところまで迎えに来ていた。そうなると、友人達と帰るわけにも行かないでので祖母と一緒に帰つてくる。「富金治郎と一緒に待つておる姿は友人達の中ではちょっと有名になつてゐた。

そんな日々が日常になつたある日、校外学習の関係でレクリエーションになつた私は六時頃まで学校に残つていた。仕事が終わらなければ帰れない、と言うことで私以外にも残つていたし、先生も残つっていた。

「これで良いかなあ？」

「うーん。でもさあ

そんなやり取りを五人程度で図書室でやつていた所で、校内放送がいきなりピンポンパンポンと鳴つた。

『五年生の須田継さん。おばあさんが迎えに来ています。至急職員用玄関に来てください』

ピンポンパンポンと鳴つたものの、図書室には静寂が降りた。何か、明らかに私が呼ばれた。

「須田さん、行って」

先生が言うので、私は「はい」と頷いて職員室へ駆け降りる。図書室が三階なのが嫌味だ。

そしてつい先には、老人用の手押し車に掴まつて立つておる祖母だった。

「ばあちやん……」

軽く頭を抱えて祖母の所へいく。

「はよ帰んべえ」

「うつ急かす祖母に困りながら、私は祖母の耳元で話す。耳が遠い祖母は、こうして話さないと聞こえないのだ。」

「ちょっと用事があるから先に帰つて。大丈夫だから」

「何言つてんだ。帰んべえ」

「祖母、別な意味で聞いていいない。すると先生が私に声をかけた。」

「須田さん、どうして帰れないの？」

「係の仕事が終わつてません」

「正直」うつ言つと、先生はあつせつとじつ返してきた。

「帰りなさい」

「は？」

意味がわからなくて首を傾げる。大体、私以外にも残っている人はいるのに、私だけ帰すとはビックリしたこと？

「良いから帰りなさい」

「でも……」

「良いから」

強く言われて、私は泣々三階へと戻る。

「すいません、帰るよ」言われてしまつたんですが、……」

申し訳なく思いながら報告すると、係の担当の先生は連絡を受け
ていたらしくあっさり私を帰してくれた。

今思えば、保護者とのトラブルを避けるための対応だったのだろうと思。しかし、私の子供時代は保護者が学校にクレームを入れる方が珍しかったため私は居心地が悪い状態で帰ることとなつた。

それ以降、私が残つての作業をしていると、先生方は私を夕方にな
る前に返すために四苦八苦するのであつた。

高校生になつてから母から聞いた話だが、私には叔母がいたらしい。
い。

父の妹である叔母はまだ赤ん坊だつたのだが、祖母と一緒に布団
に入つていてそのまま死んでいたらしい。祖母のぬくもりで、死んで
いても冷たくなつておらず、気付いた時には完全に手遅れだつた
のだそうだ。

祖母は酷く落ち込み、嘆き続けたらしい。しかし、そんな祖母に
まだ小学生ですらなかつた父は「いなくなつたもんは仕方ねえだろ

とさとしたという。何とも父らしい。

それから祖母は吹っ切れたらしい。

そんな話を聞いたら、祖母は私を死んだ叔母と重ねていたのかも
しれないと思つた。

幼少の私はかなり瘦せており、風が吹けば飛ばされるような弱々
しい外見だった。ふつと消えてしまいそうなほど気配も希薄な私は、
祖母から見て死んでしまった叔母を想起させるほど心配になつたの
ではないか。

「ずいぶん心配かけたんだから、お前も一緒に宿に入つてやれよ」

祖母が死んだ時の叔父の冗談。すかさず私はこう返す。

「違うね。一番心配を掛けたのは私じゃないもん。兄ちゃん、一緒
に入つてやれ」

「何で俺が！」

基本、我が家のは80%以上の「冗談」で構成されている。

須田はレベルが上がつた。
賢さが1上がつた。

珍妙な下宿人(?)

彼は気付けば我が家の家族であった。

高校の頃である。

姉は一ートな感じでまつたりしていたそんな時期、寒い冬は一人で「タツ」に入つてぬくぬくする事もまあある。

これよつしじばらぐ、音声のみでお届けします。

ある日の頃頃。

「寒いねえ、姉ちゃん」

「寒いねえ、けいちゃん」

「ひんなに寒いこと「タツ」から動けないねえ」

「タツのトよつ《ヒヤー》と相づりが。

「……」「

またある日の事。

「夜はもつと冷えるねえ、姉ちゃん」

「やうだねえ、けいちゃん」

一階の屋根より

ドタバタドタバタ《こやーーー みやーーー みやーーー》

「うわあああーーー」と母の声。

端的に申しますと、我が家に猫が住み着きました。

最初は子ニャン口だったソイツは、餌を求めて生ゴミをあさつたり、昼間に「タツ」の下に出没して人間の会話に割り込んだり、夜に大きなオス猫に追いかけられて悲鳴を上げたりしていました。

とっても情けないそのオス猫の毛並みは真っ白だったので、母は勝手に「シロ」と安直に呼んだ。

しかし、それで納得する子供メンバーではない。私と姉はその真っ白なニャン口の名前を考えた。

「やうだ、真っ白でブーブーしているから『うじさん』にしてよーーー。」

当時はまつっていた、ワンダフルワールド（漫画）の影響である。

やうして、ソイツは『うじさん』と呼ばれるようになった。

「うじさん」は、喧嘩に非常に弱いオス猫だった。体が小さいせいも

あるだらつが、極端に臆病なのだ。

網戸「」じに人間がたたずんで「」じん」を観察する「」の時点で警戒心ゼロでのんびりと昼寝をしてる。なので、網戸を開けてみると……『フー。シャー！』威嚇する。人間への警戒心は無いようでいて、一応あるらしい。

だが、そんな警戒心が薄れてしまふ瞬間が存在する。

餌を食べている時だ。

餌を食べる時、「」じん」は『みやうみゅうみょう』とよくわからぬい鳴き声を発しつつ食べる。あまり行儀が良くないのはノラなでビリしきりもない。

一心不乱に皿の生ゴリをむかむか「」じを見て、父はよしよしと頭を撫でていた。最初は。

そのよしよしが頭から首の辺りになり、そこから必殺ネコ掴み。食事中だった「」じは、超不機嫌そうな顔になりつつも、ぶらーんと足の着かない状況のためなす術もなく、黙りこくって吊されていた。

そんな「」じん」との別れは、寿命でなかつた。

ある日、「」じん」は「」じも通り母に餌をねだつてまとわりついていた。

そして、その日、母は「」を出すために国道を横断していた。そ

れに普段は車が怖くて付いていかない「うどん」がついてしまった。

母は「うどん」が戻ってきてるかとかは見ずに帰ってきた。

車が怖い「うどん」は、帰つてこれなかつた。

しかし、道の向い側は魚を乾燥させたりして加工する工場が多く、餌に全く困らない「うどん」はその後も元気でやつていたつする。

さて、話は変わって私と姉は姉妹なだけあって喧嘩もある。

「何だよ、お前肌がまつしろであるうどんやうどんじゃないかー！」

警めているわけではなく、からかいからくる姉の発言にカチンときた私は

「姉ちゃんんだうどんみたいにぶにぶにじゃないか！」

と応酬した。結果、こんな悪口になつてこぐ。

「どんちやんー！」

「どんどんー」

これが現在、姉が私に呼びかける時の、そして私が姉に呼びかけ
る時の呼び名となっている。

須田はレベルが上がった。
パラメーターは上がらなかつた。
愛称（？）が増えた。

珍妙な下宿人（？）（後書き）

近頃、真っ白な猫をチラチラ見るのは、もしかして……。

転んでもタタでは起れるがらない（前書き）

今回も名前をすげ替えたノンフィクションでお送りします（笑）

転んでもタタでは起きあがらない

東日本大震災にて被災された方々にお見舞い申し上げます。

さて、今回は震災ネタですが、相変わらずゆるい話なので「安心ください。ポレポレでは作者本人以外に深刻な話はほとんどありません。

東日本大震災とかなり大きなくくりでの名前になった今回の地震。NHKは未だに東北関東大震災と言っているのがちょっと不思議ではありますが、ほとんどのメディアでは東日本大震災なので便宜上そう言うことにしましょう。

私が住んでいる場所も例に漏れず結構な揺れを感じました。

その時間、会社にいた私たちをまずおそったのが停電。プログラマなんてPCと仲良しな仕事柄、停電は仕事ができないことと直結します。普段であれば30分ぐらいすれば復旧するのに復旧しない。会社のトップは行方不明。（まあ、いつも行方不明ですが）

困っていたところに早退していたN.O.2の登場と、トップからの「帰れ」命令に全員で職場を離れたわけです。

しかし、N.O.2の岡崎のおばちゃん（会社のN.O.2が女性って珍しいですが）が言ひには、「停電で信号がダメになつてゐるから、渋滞がすごいよ」とのこと。

帰り道に何個信号があるだろつ、と憂鬱になりながら帰つてみる

と……町の境から家の側は何故か停電していない。

なんじゃこりや、と思いながら家に入ると、普通にコースを見ながらいろいろ準備している家族。会社ではラジオすら聴けないと言つた。

「飯だ！ 飯を今のうちに炊くんだ！」

一斗（十升）とか米を炊く母。四人家族なのに。いつたいいつ食べ終わる計算でしょうか。途中で停電したら一斗の米とか結構つらいと思うんだ。

一方、父は居眠りしている。肝が太すぎる。姉は実は現在ありえない職についている関係上、ぱにゅっていた。あかせないので、強いて言つなら「役場関係」である。

「ど、どうせやん！ おれ、役場いくべきかなあ？」

役場までは、車で40分以上の距離であり、現在家の前の道から向こう側は避難勧告がでている状況である。

「行かないだろ？ 隣町の信号がダウンしてるから、ルート的に本庁もダウンしてくるよ

「そつか。そつかむと、本庁にせめて行つた方が良いかなあ？」

「へーん……あやこ、海に近くね？」

「うふ……」

わざと酷い立地にある事をいついつ時に責づかされる。

「何言つてんだ、裏の公民館に人が集まつてゐるはずだ、様子見に行くぞ！」

言いながら出発する母。たくましい。

そんなこんなで、三月十一日は徒步による避難所巡りで幕を閉じた。

外出する時にブレーカーを落としたら、がんだ飯になつた。（がんだ飯＝炊き方を失敗したご飯。方言）

そして十一日。どたばたと逃げ出した関係で酷い状態になつてゐる会社を綺麗にしようと出社。会社役員である関口さんに帰り際に会つた。

「須田さん、川口くんが着手に出向してゐるって知つてる?」

出向というのは、簡単に言うなら得意先の会社についてその会社の人と同じように働く扱いである。

川口さんは一年ほど前から知り合いで、話しかけ易かつたのかよく私にメッセンジャーで話しかけるようになつた男性である。あまりにもうざかったので禁止にして彼のメッセージを受け付けなくなつたのは自分でも良い選択だったと思つてゐる。この件ではツッコミ不要。

そんな彼が岩手に飛ばされたといふのはもちろん話に聞いていたため、私は頷く。

「連絡取れたんですね？」

「それがさ、向こうの工場は高台にあるんだけど、地震の第一波で解散しちゃつたらしきのよ。それでまたさきに町に降りちやつて……連絡が向こうの会社の人ともついてないらしいのよ」

要するに、行方不明って事である。

「親御さん達は……？」

彼に彼女がいないのは周知の事実なので、心配なのは親だけだろう。

「連絡が付いてないって」

「や、そうですか……」

気分が落ち込みながら、その日私は帰宅した。

そして月曜日。事態はえらい落ちを迎えていた。

「川口さん、生きてたってー！」

朝、岡崎さんの第一声である。

「良かったですね。連絡が付いたんですか？」

「いや、それがね……」

「（）から話が長いので概略を。

土曜日の段階で行方不明が確定していた川口さん。どうにか川口さんを探したい一心だった社長だが、本人がいるわけにはいかない。そこへ、外注の東さんの所に川口さんから電話が……それを誤つて切つてしまふ東さん。しかし、川口さんから電話があつたという事は、川口さんは生きている！

確信したN.O.3である平野さんは東さんの車で新潟経由で岩手に向かう事になった。東さん、とばっちりである。

そんな平野さんと東さんをバックアップするため、岡崎さんはテレビを注視し、社長はNHKに「連絡ください」の依頼。関口さんはツイッターで咳きまくり。と言つた具合に総力を尽くして連携。そして岩手についた二人は途中から歩きで川口さんを搜索。そして、川口さんの車を発見する。車の近くの避難所に平野さんが行つている時に、車の周辺をうろついていた東さんに声をかける方が一人。

「川口さんの知り合いの方ですか？」

その方、川口さんの居場所を知つていた。

急いで一人はその人の言つていた避難所へ駆けつけ、川口さんを発見。大喜びしていたのだが、川口さんは開口一番にこう言つた。

「何で二人がいるんですか？」

一人が怒つたのは言つまでもない。

そしてその日、家に帰るとコンクリートブロックが庭に積まれていた。

「どうしたの、あれ？」

「ああ、あれか？」

母は白麪びけで言つた。

「あれでカマドを作るんだ。これでガスや電気が止まつても食えるぞ！」

こゝの人は本当にたくましく生きると思つ。

須田はレベルが上がった。

体力が1上がった。

忍耐が2上がった。

川口さんへの好意が3下がった。

(最初から好意が0なのでマイナスになつたわけですがね！)

文系か理系かそれが問題だ

九九の九の段は覚えやすい。

いや、一の段が一番覚えやすいのは否定しないし、二の段も覚えやすい。けれど、九の段は付け加えて綺麗だと、小学生のころ思つたのだ。

$$\begin{array}{r} & 9 \times 1 \\ & 9 \times 2 \\ & 9 \times 3 \\ & 9 \times 4 \\ & 9 \times 5 \\ & 9 \times 6 \\ & 9 \times 7 \\ & 9 \times 8 \\ & 9 \times 9 \\ 9 \times 10 = 90 & \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 0 \\ 18 \\ 27 \\ 36 \\ 45 \\ 54 \\ 63 \\ 72 \\ 81 \\ 90 \end{array}$$

あえて十まで打ち込んだが、これで私が『綺麗』と言つた事はわかつてもらえるだろうか。

一の位は数が進んで行くことに一ずつ減つていき、十の位は一ずつ増えていく。

大人になれば当たり前のこれは、暗記してしまうと気付かない物だ。気付いているのが当たり前だと思っていた須田は、高校のあた

りでこの『綺麗』だとこつ感覺が当たり前ではない事によつやく気が付く。

そして『そんな自分は理系に違いない』と思つていたのだ。

「須田。お前の進路、情報系なのか？」

困ったように高校の進路担当の現代文担当教諭が言つ。

現在、職員室にて進路確認されている私は頷いた。そもそも、私は情報系の別の高校を受験して落ちているのだ。そして、コンピュータ関係の勉強をしたいという熱は全く冷めていない。

しかし、進路担当が困る事情も一応わかつていた。

私はまたしても出席日数が足りなかつたのだ。
欠席日数が多すぎたとも言つ。

三年になつてクラス担任から「あ、須田推薦できない」と言われた時は正直絶望した。

からうじて推薦できる専門学校は学費が高く、父が定年を迎えたために「んな高い学校に行かせられるわけねえだろ」と両親に言われ、私の選択肢はとんでもなく狭かつた。

そして、当然ながら『卒業したけど二ートになりました』は学校の評判を落とすだけである。進路担当が何とかしたい気持ちは痛いほどわかる。

「んーでもなあ……」

困りながら進路担当が言つた次の言葉に、私は凍りついた。

「お前、文系だろ？」

何故、そんなとんでもない勘違いが発生した。

全く理解不能。思わず私は押し黙る。

そして一つの仮説を思いたち、私はやっぱり固まった。

そういうこの現代文担当、一年の学年主任だから俺の成績把握してねえ。

この担当は三年間受け持つていた訳じゃなく、三年生になつてから現代文担当だ。その一年間の現代文のテストで、一度だけテストでとつてはいけない点数 百点をたたき出した事がある。（零点か百点がいるテスト問題は、問題として良い物とはされない。受験者の力量が図れていないのである）

その成績だけ考えたら、確かに文系だと思われても仕方ないかもしない。

勘違いの謎は解けた。だが、どうやってこの誤解を解けばいいのか私にはさっぱりわからない。

唸りながら説得方法を考えていた私を、隣にいた数学担当教諭が助けてくれた。

「須田は理系でしょ？」

「えー？」

本氣で驚いている現代文担当。

「そうなのか？」

今度は私に聞いてくる。そして一応頷いておく。

「数学は得意です」

「須田は数学の成績良いですよ」

答えておくと、数学担当がさらに太鼓判を押してくれた。
実際、数学の成績なら学年五位圏内です。

「知らなかつた……」

驚きながら私を見る現代文担当。

何だか複雑な気分になつた、そんな進路相談だった。

さて、短大受験は成功し、短大で友人も出来た。離れ離れでも地味に付き合いのある友人である。

そんな短大の友人の一人にこう指摘された事があった。

「けいはさ、文系と理系の両方だよね」

今では、この回答が一番正しいように思つ。

須田はレベルが上がつた。

賢さが1上がつた。

『文系』の称号と『理系』の称号を手に入れた。

続・転んでもタダでは起きあがらない

彼は予想外な心の傷を負っていた。

今回は珍しく続きもの。『転んでもタダでは起きあがらない』のその後についてです。

『転んでもタダでは起きあがらない』で見事に被災した川口さん。彼の被災話を聞きだそうと、プログラム開発の上司であり先輩である佐藤さんと食事会をしようという話になつた。

元々は男性の秋吉さんを巻き込んだ、男性一人・女性一人という食事会だったのだが、秋吉さんが急用で来られないため、川口さんを女一人で取り囲んで尋問しようということになつた。ちなみに、食事会はとんかつ屋でおこなうという、大変財布に優しい食事会だ。私の胃袋には大変優しくないが。

仕事が終わり、件のとんかつ屋に車で集合した私達は、とりあえず適当に食べ物を注文して雑談を開始する。

川口さんの出向先に新しく行くことになつた新人 もとい、私が教育担当した問題児の話なんかをしつつ、本題の地震の時の話になつた。

「もう言えません、どうして真っ先に山の上にある工場を下つたりしたの？」

佐藤さんが口火を切ると、川口さんはほほんと苦笑した。

「あの時、お客様と打ち合わせの予定があつたんですよ。あの時間だと電車でもう到着していたから、連絡取る必要があつたけど、電話がつながらないじゃないですか。だから、合流場所のホテルに行つたんです」

なるほど、考えなしに自殺行為をしようとした訳じゃなかつたらしい。しかし、その後はあまりにも川口さんだつた。

「俺、地震でものすごい動搖しちゃつたもんですから、持つてきた電話が携帯じゃなくて内線の子機で、全然使えない」

思わず突つ伏したくなつた。川口さんはカラカラ笑つている。

「でも、そこからが凄いんですよ。RPGみたいな展開で」

「どうこう」と。

「まず、ホテルでお客さんと合流したら、ロビーを開放するから外に出るなって言われちゃつて、一夜を過ごした訳です。次の日はお腹がすいたから近くの学校に行って朝ごはん貰つたんですよ」

「びっくりするほど普通に過ごしてゐるね」

「俺の住んでたウイークリーのところ、川の向い側だったから思い

「きり津波で流されちゃったみたいですねけどね。だから帰れないし、車も何か使えなくなつてたから、普通に避難所に行つてました」

のんきすぎる。

「それで、避難所で飯食つてたら、女の子と会いました……彼女も地元の人間じゃないって言つ話だつたから仲良くなつたんですよ」

予想外のラブロマンス路線。

「一人で散歩していたら、裸にタオル一枚のおじいさんに会いました」

「ちょっと待て、脈絡が無さ過ぎる」

散歩していた川口さんは、裸のじいさんを拾つた。おい。

「そのおじいさん、孫の家探してたんですけど、地震で景色が変わっちゃつてどこだかわからなくなつちゃつたらしくつて、一緒に探してあげたんです」

そこから人助けをしていたらしー。

「それで、孫の家に送り届けたら『恩人だから』って言つて布団一組貰つちゃつて」

恩人に布団を押し付けるという衝撃展開。

「その布団を避難所で使つて、暖かく過ごしてました」

「……快適だつた？」

「ええ！でも、午後にもう一度散歩に行つたら平野さん達がいて、それで帰る事になつちゃいました」

そこまで話を聞いて、私は違和感に気づいた。

「でも、東さんの携帯に川口さんの携帯から電話が入つたから、二人は行つたんですよね……？ 川口さんの携帯つてどこにあつたんですか？」

「ずっと工場のロッカーの中だつたよ。鍵かかつてたから誰も取れないはず」

「まさか……」

「混線でそんな電話が入つちやつたんじやない？」

救出劇が成功したのは完ぺきに偶然の産物だつた。

「で、出向先の人も避難所に来てたらしいんだけど、俺があんまり楽しそうに女の子と話していたから話しかけられなかつたんだつてや」

迷惑甚だしい話である。

「それで、その女の子の連絡先とかちゃんと聞きました？」

それだけ仲良くなつたんだつたから、これを機会に捕まえてしまえ、と暗に言つてみると、川口さんは落ち込んだ。

「彼氏持ちだつて会つた最初に言われた」

失恋による傷心の方が予想以上に痛手だつたらしい。

須田はレベルが上がつた。

賢さが1上がつた。

『人生はそうそう上手くいかない』という教えを手に入れた。

天国みたいなお花畠を見たぜ（前書き）

食事中の方は読まない事をお勧めします。

天国みたいなお花畠を見たぜ

食後すぐに風呂に入つてはいけなことはマジだつた。

つこの間の話である。

いつも通り夜に帰ってきた須田は、珍しく家の「」飯にあつたる
とつやしつをしていた。

「たつだいま～」

「おかげり、今田はサンマの塩焼きとサンマの刺身があるね～、ビ
っち食べる?」

「刺身!」

迷わずに私は選択する。

サンマのような青魚は鮮度を保つことが難しく、基本的に焼いて
食べる。しかし、港が近くにある様な環境のため、ごくまれに刺身
で問題の無いサンマが手に入ることがあるのだ。そうすると、母は
器用にさばってくれる。本職もびっくりする速さなのだそつだが、
母は山育ちである。

「ひやぎなれど、つまつ！」

脂ののったサンマの刺身に舌鼓を打ちつつ、私はテレビを少し見てから風呂に入つて家のパソコンを使い始めた。

気が付けば十時ぐらいになつており、私がパソコンを開放すると姉が帰つてくる。

「ただいま

「おかえり。じゃ、私はそろそろ寝るや

言いつつ普段布団を敷いている部屋を見ると、何もない。そう言えば来客があつたから布団をたたみ、テーブルを出していたのだった。

「片付け片付け

言いつつテーブルを邪魔にならない場所に運び出し、姉の分も布団を出す。現在、家にいる人間の数が多いため、私と姉は同じ部屋で眠つている。

「ふ〜、疲れた」

ちょっとした運動の後にパタリと倒れ込み、私は眠りつと思つた。しかし、何か気分が悪くて眠れない。

「姉ちゃん、何か気持ち悪いい

「ほいほい

相手をしてくれない姉。仕方ないので私は吐き氣と戦いながら田

を嘔った。

しかし、深夜十一時近くになつても眠れない。それに、何だかお腹がはつてゐる。

仕方なく私はトイレに行くも、お腹のはつは取れない。気持ち悪さから唸り声を上げてしまつ事態になり、姉が心配してやつてきた。

「どうした?」

「あもむぢわるー」

言いつつ、和式トイレだから行けないのかと思つて私は一階にある洋式トイレに向かつ。

あかりを点けつつトイレに足を踏み入れた瞬間、嘔吐。生理的な涙でぐしょぐしょになりながら口をゆすぐ。

困つた私はとつあえず副作用がまづありえないビ フュルミニンをもしゃもしゃ食べ、お湯を飲んで眠つた。しかし、何か頭がかゆい。一瞬意識が遠のき、再び意識が浮上した時に、私は気付いた。

「か、かゆいー 口までかゆいー」

ジンマシンだった。

「姉ちゃん、助けてー！」

涙目に訴えると、姉はがわいわと荷物を探し始める。

「はー、これでも飲みな

渡されたのはアレグラというアレルギーの薬。姉に頼むと大概の薬が出てくる。ドライもんか。

「コレ飲むと副作用で眠くなるからな」

現在の時間は三時ぐらい。少し葛藤したもの、背に腹は代えられないで飲む。

一応体を洗い流そとシャワーを浴び、私はようやく眠った。

次の日、朝八時に起きてしまった私はふと氣づいてしまった。

ヤバイ、事務所の鍵あけ誰にも頼んでねえ。
鍵を持っている人間が少ない上に、コンスタントに出社するのは
私以外いない。

ぐつたりしつつもやむなく私は苦手な秋吉さんに電話する。

「もしもし。須田です」

「おはよう」「わこますー。どうしました?」

「すいませー、消化不良とジンマシンが酷いので、事務所の鍵あけ
お願いしできますか?」

「鍵大臣ですね! 任せてくれさー!」

「お願ひします」

意図的な秋吉さんのボケに突つ込む気力もなく、私は電話を切る。
そして今度は事務所の方へと電話する。

本社に誰もいなくても、他の事務所の人が電話に出るはずである。

「はい、岡崎です」

お局様が電話に出た。ハズレかアタリか微妙なところである。

「もしもし。須田です。シンマシンが酷いので、すいませんがお休みします」

「あら、わかつたわ。お大事に」

「ありがとうございます。失礼します」

普ツリと切つて、私は息をつく。そして定年のため暇人な父にアクエアスの購入を頼んで眠つた。

しかし、昼になつてもさっぱり良くならない体調。
腹は痛いし、はるし、むしろ全身痛い。

「姉ちゃん、全然ダメなんだけど」

「お前の薬整理してたらこんなのが出てきたから飲んでみれば?」

手渡されたのはナウゼリンという薬。

「これは要約すれば整腸剤兼吐き止めである。」

「昨日のつに渡せば良かつたよなあ」

カラカラ笑う姉に軽く殺意を覚える。

「とうあえず飲んで様子見る」

言ひながらナウゼリンを飲んだ後に私は再び眠つた。しかし、眠り始めて一時間後、何かとても暑い。

異常を感じたため熱を測つてみると三十七度八分。三十六度が平熱だが、結構上がつてきている。

「姉ちゃん、熱が出てきた」

「風邪っぽいな。病院行くか?」

「うそ。でも、グラグラして運転無理」

「運転は代わるけど、家に誰もこなくなるなあ」

「母ちやんが帰つて来てから出発でいい」

そんなこんなで病院に行き、「サンマのせいじゃないかな」と医者に言われつつ薬をもらつた。

そしておかゆを食べた後に処方された薬を飲んで眠る。

三時間後、起きた時に私は全く喋れなくなつていた。喘息で。

筆談で姉にアレグラを貰い、飲んでから再び眠る。喘息の症状は軽くなつたのだが……

「姉ちゃん、おもむりわるい

「薬わつぱり効いてないなあ」

私は吐き氣と再び戦つていた。

「仕方ないなあ」

姉は横たわつている私の右側にくると、左手をマッサージし始める。実はこの姉、鍼灸師の免許を持つていたりする。

「ああ、ひへへ

「右手もお願ひ」

軽くお花畠を見ている私は、こじで調子に乗つた。

「あいよ~

しかし、右手をマッサージして貰つてはいる途中で衝撃が走る。駆け込むトイレ。再びの嘔吐。せよひながら、せっかく飲んだアレグラ。軽く泡立つた水を吐きました。

「うわうう、もひ、俺、ボロボロだよう

涙でぼろぼろになりながら、私は顔をタオルでふく。布団に

戻ることすら億劫だ。

「左手は吐き気止めで、右手は逆だつたんだねえ」

のほほんと分析する姉に殺意を覚える。

『新約全書』

「ああ、」めんめん。腕はダメみたいだから足裏やつてみよっ

そんな訳で、布団に戻った私は姉に足裏マッサージをしてもらうことになったのだが……

「いたいいたいいたいいたいいたいいたいいつたーー！」

「はいはい、胃腸も腎臓もさつぱりうごいてないねえ」

だから、痛いって、手加減をいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたい

姉が餓死するまで、この苦行は続いた。

そして、翌朝、何故か少しだけ回復しているのに、私は理不尽さを感じた。

須田はレベルが上がった。
忍耐が3上がった。
体力が2減った。

天国みたいなお花畠を見たぜ（後書き）

薬漬けは一週間続きました。

体調が微妙な時はやっぱり青魚に火を入れるべきだ。

テレビをつけねば（前書き）

歴史好きと歴史嫌いとの間には、埋めがたい溝がある。

テレビをつければ

年末です。

年末になると、いつも忠臣蔵関連の番組が多いんでしあう。そんな、忠臣蔵にまつわる姉との会話。コタツに入つてのんびりしていた私に、姉はこう聞いてきた。

「どんちやん」

「何？」

「新撰組ってさ、何かの門の前で太鼓叩いてるアレだよね？」

私は思わず片手で顔を覆つた。

「それ、新撰組じゃなくて忠臣蔵。何で浪人の摘発前に太鼓叩いて知らせてるんだよ」

「あれ？ そりなの？ 新撰組と忠臣蔵って、そんなに違うの？」
のん気に姉はミカンをむきはじめる。それになり、私もミカンをむきはじめた。

「やも、時代が違いやれるだろ。百年以上差があるわ」

「江戸時代だよねえ？」

「江戸時代ってのは三百年近く続いている時代なんだよー。」

「長いねえ」

ミカンを一切れ口に入れ、姉がもつしやもつしややりはじめる。

「長いよ。ってか、そもそも新撰組と忠臣蔵じゃ、やつてゐ事も全然違うよ」

「えー？ だつて、両方とも切り合ひがあるじやん」

「それで言つたら水戸黄門だつて、遠山の金をんだつて切り合ひがあるよ……」

「ああ、やつだね。つてか両方とも実在するの？」

「実在するわああー。ドラマが脚色だけなだけで、人間はいたんだよ、昔……」

説明が脱線しまくる。

「忠臣蔵は仇討あだうち」復讐の話なの！ 新撰組がやつてるのは浪人の
摘発だから、警察がテロ組織捕まえに行つてると大差ないの！」

自分で言つていて何だが、噛み砕き過ぎて原形を残していない説
明な気がする。

「じゃあ、なんで復讐してんの？」

忠臣蔵の動機つて、説明しづらいもんの要求を……。
私は少し考えてから話し始める。

「えっとね、黄、株式会社赤穂があつたんだよ」

置き換えて教える事にしました。

「その社長の浅野さんは、すごく偉い人から天皇の接待を命じら
れてたわけね。で、天皇の接待には作法があったから、その作法を
浅野さんに吉良さんが教えていたんだよ。だけど浅野さんが吉良さ
んに賄賂を贈らなかつたから、吉良さんは浅野さんを地味に苛めた
のよ」

「え、贈賄で捕まるじゃん」

「捕まらない時代の話だからそこはスルーしろ。それで、浅野さんは怒つて刀抜いちゃいけない場所で吉良さんに切り掛けちやつたんだよ。で、浅野さんは法律違反で切腹の上に、会社倒産させられちゃつたのよ。で、会社で働いている人たちがいるじゃない？ その

人たちには路頭に迷つた。もとをただせば吉良さんが社長を苛めたせいで。で、まあ、色々あつて最終的にその路頭に迷わされた社員達が、社長の恨みを晴らすために吉良さんを殺しに行く話だよ

「メチャクチャ殺伐としてるね」

「武士の話だからね。まあ、戦国時代みたいマジよ~」

「なるほど。で、何で太鼓叩いてるの?」

「知るか」

「ドラマの演出だと思つ。」

須田はレベルが上がった。

賢さが一上がった。

謎の比喩表現を手に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9467/>

ポレポレ物語

2011年12月19日20時59分発行